

文脈が保険の需要行動に与える影響 ～実験経済学的手法を用いた考察～

明治大学 商学部 藤井陽一郎

コムシス株式会社 白川竜太

1. 本研究の目的

本研究では、確率分布に与えられる文脈によって、リスク態度が安定的に観察できるかを検証する。言うまでもなく、個人のリスク態度は、効用関数の形状により決定される。効用関数は個人の選好を表現したものであるため、リスク回避度も個人により固有であると考えられている。しかし、いくつかの大規模データを用いた実証研究により、さまざまな文脈間でリスク回避度が一貫して推定されないことが指摘されるようになってきている。そこで本研究では、実証研究の一分野として急速に発展をしている実験経済学的手法を用いて、確率分布が同じで文脈が異なる場合のリスク回避度を推定する。

2. 実験経済学について

近年、実証研究の一分野として注目を浴びている実験経済学は、大きな特徴として、実際に人を使って財やサービスの取引をおこなわせることを通じて、現実の取引を教室や端末室で仮想的に再現できることが挙げられる。また、データを実験者の管理のもとで収集することができるので、意思決定の環境をコントロールすることが可能である。実験経済学は、2002年にバーノン・スミスがノーベル経済学賞を受賞したことにより、世界的に実証研究の分析手法として普及が進んでいる。しかし、わが国においては機材や予算の制約で、一部の大学が参入するにとどまっているのが現状である。

3. 先行研究

先行研究を概観すると、保険分野で多くの研究がなされていることが分かる。Barseghyan *et al.* (2011, AER) は、自動車保険と住宅保険で一貫したリスク態度が推定できないことを示している。Einav *et al.* (2012, AER) は、アメリカの企

【令和元年度 日本保険学会全国大会】

第 I セッション（経済、経営、商学系）

報告要旨：藤井 陽一郎・白川 竜太

業が提供する 5 種類の医療保険と確定拠出年金において、たかだか 30% の人々しか一貫したリスク態度を示さないことを明らかにしている。Fujii and Inakura (2019, APJRI) は、日本の医療保険の加入データと仮想的な設問を用いて、リスク態度が安定的に推定できないことを示している。

4. 実験手法

本研究では、文脈が与える効果をみるために、リスクとして 0.3 の確率で 10 万円の損害が発生し、0.7 で損害が起きない純粹リスクを考える。被験者は大阪産業大学経済学部の 24 名で、学生がイメージしやすい各文脈において、リスクから逃れるために支払っても良い最大額を答える。被験者に与えられる文脈は、①スマホ、②ロスト・バゲージ、③入院、④自転車事故、⑤就活失敗、⑥失恋、⑦自転車盗難、⑧文脈のないくじ、の 8 種類である。

5. 実験結果

実験の結果から、個人のリスク態度を推定すると、全体の 19 人 (79.2%) がリスク愛好的 (損失回避)、3 人 (12.5%) がリスク中立、2 人 (8.3%) がリスク回避的であった。この結果は被験者の多くが、Kahneman and Tversky (1979, 1992) が提唱したプロスペクト理論によって選好が表現されることを示唆している。また、損失回避的な個人において、⑧の推定結果を基準とすると、損失回避の程度が高くなるのは④と⑥、低くなるのはそれ以外であった。損失回避の程度はもっとも低いものともっとも高いもので約 20 倍もの差が出ており、安定的なリスク態度が見られないことが明らかとなった。

まとめと今後の課題

本研究では実験経済学的手法を用いて、個人のリスク態度を測定した。大規模データを用いた先行研究と同様に、個人は文脈ごとにリスク態度が大きく変化することが明らかとなった。今後の課題として、結果の頑健性を得るために、複数大学で同様の実験を実施し、被験者の数を増やす必要があることが挙げられる。